花騎士短編オムニバス

桃色レンコン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フラワーナイトガールの二次創作です。

一話完結で不定期に投稿する予定です。

目　次

おねショタのその後 ―― 1
見たことの無い景色 ―― 5
おねえさんぶってるけど年齢的にはまだロリの、少しだけ年上のおねえさん ―― 11
膝の上の小さなぬくもり ―― 16
大人とは自分の行動の意味を知る者 ―― 21
酒飲みオンナ ―― 26

おねショタのその後

「皆さん、士官学校卒業おめでとうございます。しかしこれで終わりではなく、ここからが始まりです。この国のみならず、世界中の人々を害虫から守ってくださることを期待していますよ」

これまでは雲の上の存在と漠然と考えていた、今日から主君として仰ぐこととなるこの国の女王たるノヴァーリス様からお言葉を戴き自然と背筋が伸びる。

子供の頃雪山で遭難し、街に駐留していたある花騎士に助けられ山小屋で凍えぬよう朝まで付きっきりでいてくれたあの夜。そして無事下山し、後日礼を言いに行ったら直前に彼女は転属しており呆然としたあの日から早数年。

再び彼女に会い、そして彼女に相応しい男となるべく士官学校に入学し、多くの同期が耐えきれず去っていくなか死に物狂いで食らいつき卒業に至った。

子供の頃の自分とほぼ同じ身長であった小柄な彼女の背をとうの昔に大きく超え、あの頃から少しは男らしくなったつもりである。

そして今日、ようやく第一目標であるウィンターローズの騎士団長を拝命したのだ。

……もっとも、学校を出たばかりのペーペーがいきなり直属の騎士団を持てるという虫の良い話があるはずもなかった。

まずは騎士団長見習いとしてベテランの花騎士にサポートに付いてもらい、部下への指揮のみならず事務作業や種々の管理といった様々な騎士団運用を学んでからようやく己の騎士団を持てるようになるらしい。

まだ彼女と会える日がいつになるのか分からないが、こうして一歩ずつでも前進しているのだから焦らず着実に実績を積み上げていこう。

そして今日はそのサポート役の花騎士との初の対面。どんな花騎

士が来るのか分からないが、彼女との二人三脚が今後の騎士団長生活を決めていくのだ。気が合う者だと嬉しい。
　与えられた小さな執務室の中でそわそわと待っていると、扉をノックする音が聞こえたので入室を促した。
「失礼しまーす！初めまして。本日から団長さんの教育係を命じられたハツユキソウです！花言葉は『祝福』『好奇心』『穏やかな生活』、どうぞよろしくお願いします！」
　……決意や雰囲気をぶち壊しにして、会いたいと思っていた本人が扉を開けて現れた。

「いや～団長さん優秀ですね～。これじゃ私が教えることすぐ無くなっちゃいそうですよ」
　そんなことはない。ハツユキソウの指導が上手いから出来ているだけで、まだまだ分からないことだらけだ。可能なら見習い期間が終わった後もそのまま副団長に就いてほしいくらいだ。
「私が副団長ですか!?いやいやいや無理ですよそんなの！もぅ、団長さん出会ってすぐの女性を口説いちゃダメですよ～」
　…指導役として訪れたあの日、彼女はこちらに対して「初めまして」と言っていたがまさか自分のことを本気で覚えていないのだろうか？
　聞けば彼女は優秀故に国内外を問わず転戦に転戦を繰り返し、常に最前線に送られ続けていたらしい。
　確かに最後に会ったのは子供の頃であり、長い間会っていない上にこちらは成長して背丈も声も別物。加えてそれだけ目まぐるしく動いていれば一つ一つの場所の印象が薄くなっても仕方ないだろう。
　ならば、と思い『例のアレ』を口に出してみた。

　ハツユキソウは出身はバナナオーシャンと聞いたが、最初ウィンターローズに来たときは苦労したんじゃないか？
「あー、分かります？そうなんですよー。私寒いの苦手なのに名前のイメージだけでこの国の所属になっちゃって、初めて赴任した街でも

苦労しましたんですよぉ…」
…そんなに大変だったのか？
「大変でした…。地方の街だったんで雪も多かったですし、私昔からこんな格好なんでそこの街の子達からも『雪女だー！』って言われていつも追いかけ回されたり囲まれて…。相手をするのが大変でした…」
そうか、大変だったのか…。まあ子供は全力で容赦が無いからな…。申し訳ない。
「何で団長さんが謝ってるんですか？…おまけに転勤する前日にいつも私の周りに来てた子の一人が冬の雪山で遭難しちゃいまして。他の人達が全員害虫討伐で出払ってて、その日非番だったんですけどすぐ動けるのが私だけだったので慌てて捜索に行きました」
…！
それで、その子は見つけられたのか？
「はいっ！日が沈む直前に見つけて近くの山小屋で一晩過ごしたあと下山しました！いや～あの時は初めての遭難者の捜索で、見つけられて心底ホッとしましたよ～」
それなら良かった。
でも外が吹雪だった上に慌てて出たから装備が十分じゃなくて、それでも何としても男の子を無事に帰そうと大変だったろう？
「そう！そうなんですよーっ！あの時はもう必死で……えっ？」
濡れた服の着替えも持ってこなかったから二人で裸になって毛布にくるまりながらくっついて暖めあって、男の子が興奮してしまったのと運動して体を暖めるために自分だって初めてなのにハツユキソウが上になって…。
「わ゛ぁぁぁぁぁぁぁぁストップストップストップぅぅぅ！何で!?何で団長さんがそれ知ってるんですか!?それ絶対に内緒だって言ったのにぃぃぃっ！」
安心してほしい。あの時の事は今まで誰にも言ってこなかったし、今後もハツユキソウ以外に言うつもりはない。

……ハツユキソウねぇちゃん、やっぱり気付いて無かった？
「えっ…あっ！団長さん、名前っ！それに歳も…えっ、じゃあ……嘘っ!?えぇぇぇっ!?団長さん、あのあと士官学校に行ったんですか!?じゃあ団長さんこれから騎士団長になるんですかっ!?」
最後は混乱しすぎて支離滅裂になっているが、ハツユキソウの言う通りあれから士官学校に入って、騎士団長になるべくここにいる。
…街に戻った後すぐにいなくなってしまったハツユキソウにお礼を言うためと、またハツユキソウに会うために。
ハツユキソウが来てくれなかったら、あのまま山の中で力尽きており今ここに自分は居ない。
あの時助けに来てくれて…本当にありがとう。
「え、えへへ…どういたしまして。何だか改まってお礼を言われると恥ずかしいですね…」
あと凄く気持ちよくて最高の『卒業』だった。ハツユキソウお姉ちゃんありがとう！
「んぅんぅんぅんぅっ！それは言わなくていいですっ！」

その後特に問題もなく見習い期間が終わり、自分の騎士団を持ち晴れて正式な騎士団長として活動を始めることとなった。
まだ小規模で担当する任務も小さなものばかりだが、害虫から人々を守るために奮闘し少しずつ実績を重ねて上からも認められている。
「団長さん、準備完了ですっ！いつでも出撃出来ますよっ！」
ちなみに無理を承知で上官に拝み倒したところ、なんとハツユキソウが副団長に就くことを許してもらうことができた。
今では右腕でありエース、そしてパートナーとして彼女無しではいられなくなっている。

…ところで初めて会った頃から見た目が全く変わってないんだけど、ハツユキソウは今何歳なんだ？
「ちょっ、×
×く…団長さんっ！女の子に歳を聞くのは無しですよっ！」

見たことの無い景色

ロータスレイク水中都市の王城。
私的に何度も足を運んだこの場所だが、今日は任務のためにブロッサムヒルの騎士団の団長という公的な立場としてここにいる。
「確かに、事前に渡されていた目録通りの現物と資料を受け取りました。我が国の機関でも重要課目として研究し、成果を各国と共有させていただきます。ブロッサムヒルの騎士団長様、本日はご足労頂きありがとうございました」
そしてその城内の応接室にて、花騎士であると同時にこの国の女王でもあるハス……の部下のカキツバタと机を挟んで対面していた。

今日ロータスレイクを訪れているのは、任務であるものを届けに来たからだ。
最近対害虫の研究機関で開発された映像を記録・出力する魔法がかけられた水晶である。
もしこれが実用化されれば伝令の確実性を上げたり、害虫の行動を記録して早期に弱点の発見出来るようになるかもしれない。
だがこれはあくまで試作品であり、性能もコストも実用化には程遠いため各国で共同研究することになったのだ。
そんなまだ一般には出回っていない非常に重要な物品であったため、この国の女王であるハスとも面識のある自分が水中都市への護送兼説明役として派遣されたのだ。
あいにくハスは急な要件が入り対応出来なくなったらしく、側近であるカキツバタとこうしてやりとりをすることとなった。

カキツバタは受け取った試作品と資料を大切に仕舞い込むと、すぐにこれを研究施設へと届けると言い立ち上がる。
ならば自分も荷物持ちとして一緒に行こうと告げると、カキツバタは丁重にそれを断りカバンを持ち上げた。
「団長様。私に構うよりも早く会いたい方がおられるのではないんで

すか？今頃要件も終わっているはずですから、この時間なら自室に戻って寛がれていると思いますよ」
そんな簡単に自分にこの国のトップである女王の所在を教えていいのだろうか？いくら何でもそれは無防備すぎやしないか。
苦笑しながらそう告げると、カキツバタは悪戯っぽくウィンクして勿論ダメだと言い放った。
「でも団長様だから特別にオーケーです！私は団長様を信頼していますし、団長様はそれに応えてくださる誠実な方だと理解しているつもりです。何より！あの方自身が団長様と会いたがっておられるのですから！さあさあ、お仕事の時間は終わったのですから、部屋の場所はご存知ですし後はお二人でごゆっくり！」
そう言ってカキツバタは満面の笑みで応接室から出ていった。
…そこまで信頼されているのであればそれに甘えよう。何より、カキツバタの言った通り彼女に早く会いたくて仕方がなかったのだ。
応接室から出て何度も通った城内の通路を歩いていくと、迷うことなく目的の部屋に辿り着く。そして部屋の扉をノックして声をかけると、中から部屋の主の入室を促す声が聞こえてくる。その声に従い中に入ると、
「団長！あぁ、久しぶりだなぁ…。ずっと卿とこうして抱き合いたかったんだ…！」
豪奢な衣装を身に纏った長いピンク色の髪の少女……この国、ロータスレイク水中都市の女王ハスが嬉しそうな顔をして胸に飛び込んできた。

ロータスレイク女王のハスとブロッサムヒルの騎士団長の自分は、国も身分も違えどれっきとした恋人同士である。
この国に私的な理由でたびたび訪れるのも、当然ハスとの逢瀬のためだ。
お互い女王と騎士団長という多忙な身分のためなかなか会う機会を作るのは難しかったが、それでもハスが花騎士としてブロッサムヒルを訪れたり自分がロータスレイクに任務で来た時には必ず顔を合

わせて甘い時間を過ごしてきた。

しばらく二人で抱き合い、たっぷりと時間をかけて唇を重ねる。離れていた分の時間を取り戻さんと言わんばかりに温もりを求めあい、唇を離した頃にはお互い息が上がってしまった。

「すまなかったな団長…。本来であれば私自身が卿を迎え入れ対応したかったんだが、どうしても外せなかったんだ…」

ハスは申し訳なさそうに言葉を紡ぐが、この国の女王であるハスは多忙を極めていると分かっている。今日こうしてちゃんと会えたのだから問題ない。

「う、うむ…公務では無かったのだが…まあ、卿と会えたことに比べれば些事だな！立ち話もなんだ。話したいことだって山ほどあるし座ろう」

そう言ってハスはメイドを呼び茶を持ってこさせ、二人で語り合いながらゆったりとした時間を過ごしていった。

ところで今日はちょっとした面白いものを持ってきたのだ。ぜひハスにも見て欲しくて無理を言って借りてきものだ。

そう言って荷物の中から持ってきたものを取り出しテーブルの上に置く。それをハスは興味深げに見て、その正体に気付くとあっと驚きの声を上げた。

「なっ、これ…例の水晶ではないか！まだ実用化されていなかったはず…なぜ卿がもう一つ持っているんだ？」

微弱ながらも魔力を帯びた透明な球。それは、任務でこの国に運び込み先ほどカキツバタに引き渡した水晶と同一の物である。

実はこれは先輩の騎士団長から借りた物だ。実験の一環で実際にこの水晶を使っている先輩があちこちで撮った各地の珍しい風景が記録されており、その内容が面白かったためぜひハスと一緒に見たくて頼み込んで借りてきたのだ。

「ほう、卿がそこまで言うほどとはな。ここで一緒に見よう。楽しみだ！」

ハスは他国の風景と聞き、目を輝かせながら水晶に手をかざし大量の魔力を送り込む。すると水晶が光りだし、溜め込まれた映像が流れ出してきた。

「なるほど…確かにこれは面白いな……」

本来であれば実際に旅して目にするか絵で見るしかない珍しい風景が、空中に投影され目の前に映し出されていく。

ノイズ混じりで途切れることもあるとはいえ音まで入っており、二人で持ち主の達者な実況や解説に聞き入ってしまう。

本来の持ち主である先輩騎士団長は士官学校時代から口が達者であり、その才能がいかんなく発揮されていた。

「これは良いものだな。この目で実物を見るよりも遥かに劣ると思っていた映像がこうも娯楽として成り立つとは。もしこれが一般に払い下げられ出回るようになれば世の中はひっくり返ること間違い無しだ。戦いの補助としてのみならずこういう使い道もある……実用化の研究だけでなくこうした利用法も今の内から研究させるのもアリだな…」

ハスが映像を楽しみながらも別の利用方法を考えていると、先輩団長の恋人である花騎士の映像が映し出される。

楽しそうに未発表の新作の服に着替えては撮っている先輩に意見を求め、褒められるたびに嬉しそうに笑っていた。恋人に向けられる彼女の表情はとても眩しく、彼を愛しているのがそれだけでよく伝わってきた。

そして最後に彼女の生まれ故郷の雪景色を背景に彼女を映したところで水晶の光が消え、記録されていた映像は終了した。

「彼女とは花騎士としての任務で何度か一緒に戦ったことがあったが…そうか、彼女が話していた恋人が卿の先輩だったのか…」

途中まで楽しそうにしていたハスであったが、彼女の姿を見てから何やらしんみりとした表情を浮かべていた。

「彼女は恋人と共に自由に色々な場所に行き、様々な思い出を作っているのだな……。それに比べて私は卿と逢うことすら難しく、恋人ら

しいことを全然出来ていないな…」
　そんなことはない。逢った回数や頻度など些細なことだ。何より愛し合っているのが大事な事だろう。
　そう言ってハスの言葉を否定するが、ハスは力なく笑いを返す。
「今日卿を出迎え出来なかったのもな、父が直接出向いてきて見合いの話を持ってきたからなんだ。『お前は女王なのだから相応の相手を伴侶にしなければお互いに苦労するぞ！』とな。余計なお世話だと聞き流していたが……こうして楽しそうに色々な場所を恋人と共に訪れる彼女の姿を見ると、あながち間違いではないかもしれんと思ってしまった。私は卿の重荷になっているのではないか、とな」
　ハスがそこまで言ったところで椅子から立ち上がり、彼女をギュッと抱きしめた。
　恋愛の形は人それぞれなのだ。彼女達には彼女達の、自分達には自分達のやり方というものがある。ハスが言ったようなことなど自分は一度も思ったことなど無い。たとえ今はなかなか逢えなくとも、自分の横に立っているのがハス以外の女性であるなど想像出来ないし、ハスが自分以外の男の物になるなど想像すらしたくない。
「団長……んっ…」
　こちらの考えを告げ、その想いを行動で示すためハスの唇を塞ぐ。
　ハスもそれに応じてこちらの背中に手を回し、抱き返してくれた。ハスと会えないことに比べてば自由に様々な場所へ出歩けないことなど小さなことだ。何より、これから二人で歩んでいくことこそが思い出なのだ。
　口付けはヒートアップし、舌を絡ませ合っていく。ハスを求め、より深くで繋がりたいという興奮が高まりハスのスカートに手を伸ばし
「……コホン」
　……ずっと同じ部屋にいてお茶を淹れてくれていたメイドさんの咳で、二人きりではなかったことをようやく思い出した。
「だだだ団長っ！今日は泊っていくのであろうっ!?そろそろ客間に荷物を置いて来てはどうだろうっ!?夕食も共にしようっ!?」

そうだなっ！ではそろそろ一度お暇させてもらおうかなっ!?あと水晶を預けた研究施設に挨拶に行きたいしなっ!?
「うむっ！では施設までの道案内を手配しようっ！それまで部屋でゆっくりしていってくれっ！なっ！」
揃って顔を真っ赤にし大急ぎで体を離し、早口で捲し立ててその後の行動を口にする。
二人の慌てように流石に申し訳なさそうにしていたメイドさんを尻目にハスの部屋を出て、他の使用人に用意された客間まで案内してもらった。

その後ハスと共に夕食を楽しみ寝る時間となったが、そこでようやく例の借り物の水晶が無いことに気付いた。
夕食の時にはハスは何も言っていなかったが、よくよく思い返せばあの時水晶を荷物の中に戻した記憶はない。
ならば、あれは今ハスの部屋にあることになる。借り物であるし、何より大切な物なので本来は常に手元に置いておかなければならない物だ。
ちらりと時計を確認したあと、大事な物を取りに行くのだから仕方ないという言い訳をして部屋を出る。
そしてハスの……夜中の女性の寝室まで赴きドアをノックし、部屋に招き入れられた。

しばらくして扉の鍵が閉められ、次に開けられたのは朝日が射し込む時間になってからであった。

おねえさんぶってるけど年齢的にはまだロリの、少しだけ年上のおねえさん

ロータスレイク水上都市のとある公園。
敷地内のベンチで一人の少年がそわそわしながら誰か来るのを待っていた。
天気は雲一つ無いよく晴れたデート日和であり、少年がどんな相手を待っているのかは誰が見ても明らかであった。
「おーいっ！お待たせしました～っ！」
少年が声の先に目を向けると、彼よりも少し、ほんの少しだけ年上そうな少女が満面の笑みが浮かべながら走り寄ってくる。
忘れっぽいから待ち合わせ時間や場所を忘れてないかヒヤヒヤしたよ。
少年はそう軽口を叩くが、今は約束していた時間よりだいぶ前。デートを楽しみにしすぎた少年が早く来すぎているだけである。
「えへへっ、忘れるわけありませんよ。だって…か、彼氏さん、とのデートなんですから…」
少女は彼氏という単語を口に出したことで、少年は少女の口からその単語が自身に向けて言われたことで互いに顔を赤らめており、実に初々しい甘酸っぱい空間を作り出していた。
その光景に周りにいたご年配のお姉様方はニコニコと微笑み、外回りの休憩中のおじ様は過ぎ去った己の青春を思い返し、恋人のいない歴＝年齢の者達は爆発しろと心の中で怨嗟の声を上げていた。
「そ、それより！ホーちゃんより先に来てて偉いです！女の子を待たせない彼氏さんはなでなでしてあげます！」
自身をホーちゃんと呼ぶ少女…ホルデュウムは未熟な小さい胸を張りながら、まだ自分と同じくらいの背である少年の頭に手を伸ばしお姉さんぶりながら頭を撫で始めた。
ホルデュウムはロータスレイクに属する花騎士であり、同時につい

最近王立聖護湖機関ネライダに加入した年若い少女である。
彼女は名門の出であるが、持ち前の明るさと誰であろうと分け隔てなく接する心優しさで多くの者と交流を持ち、平民である少年とも幼少の頃からの知り合いであった。歳が近いこともあって二人は姉弟のように仲が良く、その関係がいつまでも続くと思っていた。
だがいつまでも続くものなどこの世には存在しない。
二人の姉弟のような関係も、つい最近あっさりと終わりを迎えた。
少年は成長に伴いホルデュウムを姉のような存在から一人の身近な女性、恋愛対象として意識するようになっていった。そして想いを告げ、ホルデュウムが受け入れたことで晴れて二人は若い恋人同士となったのだった。

そんなまだ短い人生の中で既に絶頂期を感じている少年は、生まれて初めての恋人とのデートでありながら非常に困っていた。
ホルデュウムが無防備すぎるのだ。
慎ましいながらも女性特有の膨らみを服の隙間から覗かせたり、短いスカートから眩しい太ももを見せつけてきて目のやり場に困っているのだ。
「あっ、お財布が落ちてます！きっと今頃落とした人は悲しくなっちゃってますね。交番に届けてあげましょう」
ホルデュウムがそう言って地面の財布を拾おうと屈むと、スカートの隙間から一瞬白い布地がチラリと見えた気がした。少年は他の者に見せたくないと思わずホルデュウムの真後ろに立つと、財布を持った彼女は困惑して頭上に疑問符を浮かべた。
「ど、どうしたんですか？急にホーちゃんの後ろに立って…」
少年は顔を赤くしながら白…と呟くと、しばらく考えた後にようやく理解したホルデュウムが今更真っ赤になりながらスカートを押さえつけた。
「は、はうぅぅぅ…ありがとうございますぅ。…ホーちゃんを守ってくれたんですね。ありがとうございます」
そう言ってホルデュウムはお礼のつもりで少年の頭を撫でるが、逆

に少年は子供扱いされているように感じ、もしや自分は異性として意識されていないのではないかと少し考えてしまう。だがホルデュウムの肌と触れているという事実に思春期真っ盛りな少年はすぐにその考えを頭の隅に押しやり、ホルデュウムの柔らかな手つきを堪能した。

そうして二人は時間を作ってはデートを繰り返し、順調に関係を進展させていった。

街中で手を繋いで並んで歩いている途中、彼女の上司というとびきり美人の女性と会い話し込んだ時は、ホルデュウムが間に入り

「むぅ〜！ホーちゃんの彼氏ですよ！あげませんからね！」

と、小動物の威嚇のごとく対峙していた。

二人きりになった後あんな美人の大人な女性が自分を相手にするわけがないと少年は笑ってしまったが、それで納得しない彼女を落ち着かせるため店で甘味の食べさせ合いもした。

その光景を目にした店員たちは顔を赤くしたカップルに微笑み、美味しい美味しいと注文を重ねていた新人花騎士は邪魔せぬようそっと店を立ち去り、恋人のいない歴＝年齢の者達は爆発しろと心の中で怨嗟の声を上げていた。

そして今日は、二人が付き合いだしてから初めてホルデュウムを少年の自室に招くこととなった。

「おじゃましまーす。このお部屋に来るのもなんだか久しぶりですね〜。昔よりちょっと大人っぽくなってる気がします！」

そう言って部屋に入ってきたホルデュウムを迎え入れ、少年は飲み物を取りに一旦部屋を出た。そして二人分の飲み物を持って部屋に戻ると、扉を開けた瞬間少年は中の光景に固まってしまった。

「おぉ〜。スーさんの言ってた通り、本当にエッチな本が本棚の裏に…。ひゃぁぁぁ……」

年上の彼女が、ホルデュウムがベッドに座って秘蔵の本を顔を赤くしながら読んでいるのだ。

ページをめくるたびに小さな悲鳴を上げながらも、卑猥な本の内容から目を離すことはせずひたすら読み進めていた。
一体…何をしているんだ？
何とか声を振り絞りそう話かけると、少年が戻ってきていたことに気付いていなかったホルデュウムがビクンと肩を震わせて顔をあげた。
「きゃあっ!?…あ、ご、ごめんなさい。その…今日、あなたの家に行くって言ったらスーさん……先輩に『男の子はエッチな本を本棚の後ろ側に隠しているはずだから確認しておきなさい』って言われて…」
その先輩は人の彼女に何を吹き込んでいるんだ。
そう考えながら、手遅れと思いつつも少年はホルデュウムから本を取り上げる。
よりによってホルデュウムに、恋人にこんなものを持っているとバレてしまった。幻滅され嫌われるかもしれないと少年は青ざめていると、ホルデュウムが顔を真っ赤にしながら話しかけてきた。
「お、男の子ですからそういうエッチなことに興味があるのは仕方ないですね！……その…ホーちゃんとキス……したいですか？」
その言葉を聞き少年は耳を疑いながら顔を上げると、ホルデュウムがモジモジしながら恥ずかしそうに続けた。
「ホーちゃんも、そういうことに興味が無いわけじゃないです…。それに、大好きな人とはそういうこと…したいです」
少年とホルデュウムの視線が交差する。彼女の目には羞恥だけでなく、これからすることへの期待と熱が帯びていた。
少年の喉が、ゴクリと鳴った。

ベッドから降り二人は向かい合って座ると、これからすることへの緊張でお互いガチガチに固まっていた。
このままでは埒があかないと少年は勇気を振り絞り、ホルデュウムの肩を掴む。ホルデュウムは触れられたことで一瞬ビクリと体を震わせるが、すぐに力を抜いて目を瞑った。
少年の耳にはもはや高速で鳴り響く己の心音しか聞こえていない

が、それすらも気にならないほどホルデュウムの唇を見つめている。
そして意を決して顔を近付け……二人の唇が軽く重なった。
「ちゅっ…」
気恥ずかしさから唇が触れた瞬間は二人とも目を瞑っていたが、むしろ視界を遮ったことで唇から伝わる相手の熱や柔らかさ、吐息をはっきりと感じ取ることが出来た。
「ちゅっ、ちゅう…はぁん…ちゅうぅ……」
今度は一瞬の重なりとは違い、長い口付けを行う。
ホルデュウムの少女特有の甘い香りが少年の鼻腔をくすぐり、彼女が性別など気にせず一緒に着替えた昔と違い『女』へと変わっていることを物語っていた。
方やホルデュウムも自身の肩を掴む少年の力強さに、年下の弟のような存在から『男』に変わっていたことを感じ取っていた。

しばらくしてようやく唇を離すと、二人とも興奮と羞恥で顔を真っ赤にしていた。
「ホーちゃん達…キス、しちゃいましたね……」
うん、と少年は頷く。
「その…ホーちゃん、好きな人とのキスがこんなに幸せな気持ちになれるって知りませんでした…。今、凄くぽかぽかして、ポーっとしちゃってます。えへへ…」
同じ気持ちだよ、と少年が言うと、二人は照れ臭くなって笑ってしまった。
そしてしばらく見つめあったあと、二人の影は再び重なりあったのだった。

その後二人はデートの終わりには必ずキスをしてから別れを告げるようになり、その光景を見たちびっこ達はチューしてると囃し立て、仕事帰りの若者は早く同棲中の恋人と会いたくなって帰路を急ぎ、恋人のいない歴＝年齢の者達は爆発しろと心の中で怨嗟の声を上げていた。

膝の上の小さなぬくもり

「団長さま、起きておられますか？」
仕事もとうに終わり、自室で寛ぎ後は寝るだけとなった時間帯。
窓から見える花騎士達の寄宿舎からも次々と灯りが消え夜が深まっていくなか、ノックと共に幼い少女の声が聞こえてきた。
「団長さまー！あなたのハナモモが参りましたわー！」
扉を開けると、声の主であるハナモモが元気よくこちらの胸に飛び込み部屋に入ってきた。
ハナモモの服装は、任務でいつも着ているハナモモに似合った可愛らしいものとは異なり、ベッドから飛び出してきたかのようなパジャマ姿だ。
同室のビオラとお揃いで買ったというその寝間着はハナモモの可愛らしさを存分に引き出しており、思わずこちらも微笑んでしまう。
「えへへぇ…団長さまぁ…♪」
そしてその顔はこれから始めるいつもしている事への期待で満面の笑みを浮かべ、彼女の喜びをこれでもかと伝えてきていた。
こちらもそれに応えて微笑み、彼女を共に寝室へと入っていった。

「そこでホップさんがクレソンさんにおっしゃったんですの！『そうだ！流しそうめんで水とそうめんの代わりにお酒とアルコールを流そう！』って！」
目の前のハナモモは嬉しそうに今日あった出来事をこちらに語りかけてくる。
夜に大の男の部屋を訪れ、寝室で二人がいつもしていること……それは、ハナモモとお喋りをしながら髪を梳かしてやることだ。
お喋りといってもそこはやはり女の子。ハナモモの方が喋る量は圧倒的に多く、こちらは櫛を通しながら話を聞き、相づちを打つのがいつもの光景だ。
「酔っ払ったプラムさんがずーっと私のことをプルーンちゃんと間違えてたんですのよ！もう！あたしそんな子供じゃないですわ！」

と、そこまではまだ端から見てもギリギリセーフ、あるいはツーストライクの崖っぷちといったところだろう。
ちなみに今座っているのはベッドのふち。そしてハナモモが座っているのは、ベッドに座っているこちらの膝の上だ。人によってはもうアウトだろう。
さらに彼女の風呂上がりの髪から漂ってくるシャンプーの香りが鼻孔をくすぐり気を抜けばそのまま抱き締めてしまいそうになる。ツーアウト。
そして膝の上からハナモモの体温と成長し大きくなり始めた尻の重さ、何より女の子特有の柔らかさが伝わってきてしまい、彼女の髪に集中していなければ間違いなく興奮の物的証拠を晒してしまうと確信できる。スリーアウト。
ベイサボールなら試合終了、そして社会的に場外だ。
始めの頃は椅子に座ってやっていたはずが、『団長さまのお膝の上はとても安心できますの』と言われ、それ以降こうして膝の上で髪を梳かすようになってしまった。
ちなみにわざわざベッドに座っているのは、ハナモモが幼く小さいとはいえさすがに人ひとりをずっと乗せ続けると疲れて痛くなってくるからである。
やましい意図は一切ない。

もうそろそろ髪を梳かし終える。この可愛らしい発展途上の花騎士との楽しい時間ももうすぐお開きだ。
今日もハナモモの髪は触り心地が良く艶があり、彼女がモモに師事してキチンと手入れしていることがよく分かる。
「んふふ。団長さまの手、大きくて優しくて……モモお姉さまとは違った安心感がありますわ。自分でやるのとはやっぱり全然違いますわね」
ふと、この綺麗な髪をこうして委ねられ、触ることを許されている現状がどういうことなのか考えてしまう。
自分は間違いなくハナモモに信頼されている。でなければこうし

て女の子の命ともいえる髪に気安く触ることなど許されるはずがないのだから。
こんな時間に男の部屋に一人で来るのだって、その信頼の証だ。
ただ色っぽい思惑よりも、
『夜は大人の時間っ！団長さまのお部屋で二人きりでこの時間を楽しむ（※深い意味は無い）のはレディーの嗜みですわっ！』
『ふにー！ハナモモちゃんとっても大人ですー！』
なんて微笑ましい会話が脳内でイメージされるが。
ハナモモはモモに憧れてかなりおませとはいえ、流石にそこまで〝大人〟な意味と行為を理解して来ているわけではないだろう。きっと。おそらく。
これらのことを総合的に、そして客観的に判断して、自分はハナモモに好かれているのだろう。それも頼れる大人という保護者に対する「Ｌｉｋｅ」の好きではなく、生まれた時から備わっている女としての本能から来る一人の男に対する「Ｌｏｖｅ」の好きという意味で。
それは大人としてとても微笑ましく、その好意を自分に向けてくれているというのはとても嬉しくある。

…正直に言おう。
ぶっちゃけこのまま押し倒したい！押し倒して溜まりに溜まった欲望を全部この小さな体に注ぎ込み汚し尽くしたい！
当然であろう。こんな可愛い娘にここまで明確に好意を示されているのである。これまで何度もこのまま抱き着いてベッドに寝かせたいと思ったか。
この可愛らしい服を剥ぎ取りその下にある未成熟な果実を収穫したいという欲求をどれだけ食いしばって耐えているか。
ハナモモをこの手で啼かせ少女から女に、雌にする夢を何度見て、目を醒ますたびに落胆したことか！

この生殺し状態を現状維持している自分に勲章を贈りたいくらいである。
「団長さまぁ～。もう、そんなに見つめられたら恥ずかしいですわぁ～」
当のハナモモは膝に座ったまま、こちらの気も知らずに嬉しそうに頬を染めている。
可愛い。贅沢言わないから爛れた関係になりたい。
だがこちらも世間体がある。
先日同僚たちがそれぞれウサギゴケ、ヒナソウとの交際を公表していたが、生憎そこまで吹っ切れる勇気は無い。
とりあえず現状維持が最適解なのだ。その間にハナモモが年相応の男の子に恋して甘酸っぱい初恋としてこちらを忘れたとしても、優しく見送ってやるのが大人というものである。
……やっぱりあと10年遅く生まれたかったなーっ！

そして夜も更け、明日も仕事があるためハナモモを帰す時間となった。
「ふぁ～。もうこんな時間ですのね。楽しい時間はあっという間ですわ。もっと団長さまと一緒にいたかったのに…」
それは内心こちらも同じだが、このまま居れば理性が消し飛びハナモモのお花をマン開に咲かせてしまうため帰ってもらうしかない。
別れを惜しむハナモモと共に彼女の部屋の前まで送り、明日に備えよう。
「あ、そうですわ！団長さま、いつも髪を梳かして下さるお礼をしたいので目を瞑ってくださいませんこと？」
膝に乗ったままもぞもぞと器用に体を動かしハナモモはこちらと向かい合うと、何やらそんな提案をしてきた。
何をしてくれるのだろうか？物は持って無さそうなのでキスでもしてくれるとでも？
そんな欲望丸出しの期待をしつつ言われた通り目を瞑っていると、ふわっと子供特有の日向の匂いがしたと同時に頬に柔らかな感触が

した。
「えへへ…。団長さま。いつもありがとうございます」
ハナモモは上目遣いをしながらお礼を言い、顔を赤くしながらようやく膝から降りてくれた。
…これはイケナイ。色々とナニかがバレる前に早く帰さねば。

その後は何事もなく…何事も起こさないようにしてハナモモを彼女の部屋の前まで送り別れの挨拶を告げ、後は戻って寝るだけとなった。
「お休みなさい団長さま。…あ、あら？鍵が閉まって…。もしかして、ビオラちゃんもお出かけしてる…？」
どうやら扉の鍵が閉まっており入れないようである。この様子ではハナモモは鍵を持っていないのだろうか？
こんな夜更けにビオラがどこに行っているのかはさておき、ハナモモが部屋に入れないのは一大事だ。
「だ、団長さまぁ……。あたし、鍵をお部屋に置いたまま来ちゃったんですの。今晩は団長さまのお部屋に泊めてくださいませんかぁ…」
ハナモモの懇願に一瞬体が固まったが、涙目で訴えてくるこの少女を無下に出来るだろうか？
…答えは否。こんな時間に他の部屋にハナモモを泊めるように聞いて周る訳にもいかず、かといって彼女を廊下で寝かせるなど論外。
残された選択肢は、首を縦に振る以外に残されていない。
観念してハナモモと手を繋いで来た道を戻り、本日二度目の寝室への来訪を受け入れる。

そしてこの団長就任以来最大の危機を乗り越えるべく、理性を総動員しながらハナモモの待つベッドに入ったのだった。

大人とは自分の行動の意味を知る者

「ふぅ～。お片付け、一日で終わって良かったねーっ！」
つい先程まで行っていた長年使われていなかった倉庫の片付けを終え、副団長であるシャボンソウと共に全身埃まみれで廊下を歩いていた。
すぐ終わる簡単な作業と高を括っていた結果がこれだ。綺麗好きのシャボンソウには本当に申し訳なかった。
「大丈夫だよ～。わたし、汚れたものをお掃除やお洗濯で綺麗にするのも大好きだもんっ！最後に綺麗になった倉庫を見て、とってもしゃわしゃわした気持ちになれたんだ～♪」
そう言ってもらえるならありがたい。お詫びと言ってはなんだが、少し早いが今日は上がってもらって構わない。風呂に入って体の汚れと疲れを落としてくれ。
「は～い♪団長さんも真っ黒なんだからすぐにお風呂に入らなきゃダメだよ？このままお仕事したらお部屋も書類も汚れちゃうんだからっ！」
言われて自分の体を見回すと、なるほど確かに服も体も大いに汚れてしまっている。このまま机に向かえば被害が拡大してしまうのは目に見えていた。
ならいっそのこと自分も今日はこれで切り上げだ。急ぎの用件も無いし、汚れを落とすために今から風呂に入ってしまおう。
「うんうん、それがいいよ～。じゃ、わたしもお部屋に戻って入浴道具を持ってくるよ～」
こうしてシャボンソウとはその場で別れ、着替えを持って風呂場へと向かった。

風呂はいい……。人間が生み出した文化の極みだ…。
シャボンソウと別れてすぐに騎士団長専用の風呂に行き、頭からお湯をかぶって汚れを流した。
風呂場に立ち込める湯気が空気に湿気と温かさを与え、呼吸をする

だけで体の内側に心地よい熱が広がっていく。
早く湯船に浸かって芯まで温まりながらゆっくりと足を伸ばしたい欲求に駆られるが、それはマナー違反というもの。湯を浴びただけでは汚れが落ちたとは言い難く、しっかりと体を洗ってから入るべきなのだ。
そう思い以前シャボンソウから貰ったいい香りの石鹸に手を伸ばすと、突然脱衣所の扉が開かれ小柄な誰かが入ってきた。
「あっ、団長さんその石鹸使ってくれてるんだね！ありがと～！じゃあわたしがその石鹸でお背中流してあげるねっ！」
突如現れた我が騎士団の副団長に固まっているこちらをよそに、水着姿のシャボンソウが豊満な双丘を揺らしながら近付いてきた。

「団長さん、さっきのお片付けで重い荷物や特に汚れていた資材をわたしの代わりに全部運んでくれたでしょ？だから日頃の労いも兼ねて、わたしが団長さんをしゃわしゃわしてあげるよ～」
シャボンソウに背中を流してもらいながら説明を求めると、このような返事が返ってきた。
なるほど、それで水着に身を包んでわざわざ来てくれたのか。むしろ戦いでは前線に立ち副団長として周りを鼓舞しながら害虫と向かい合い、戦いが無ければ団長である自分と共に事務や雑用を引き受けてくれるシャボンソウこそが労いを受けるべきだと思うが、今この場でそれ言うのは無粋というものであろう。
後日行うことにするシャボンソウへの日頃の礼を考えながら、鏡越しに彼女の姿を見る。
「ふんふふ～ん♪しゃわっしゃわ～♪」
清楚なイメージによく似合う白と水色のビキニに身を包み、頬に泡を着けながらニコニコと笑いながらこちらの体を洗ってくれている。
この姿を見て可愛いと思わない男がいるのだろうか。いやいない。
そんな彼女に背中を流してもらえてるという、世の男子が聞けば嫉妬で狂いそうな役得を一身に受けている自分はなんと幸せなのだろうか。

だが、ここで一つ問題が発生している。
確かにシャボンソウは可愛いが、それ故にこの光景は非常に目の毒であった。
泡立ったスポンジを持つ手が上下に動く度にその豊満な胸部が腕に圧され、ぷるぷると柔らかそうに形を変えながら揺れている。
ベルガモットバレーの渓谷よりも深さを感じる魅惑の谷間が強調され、首筋から伝ってきた汗が曲線に沿って落ちていく。少しサイズが小さいのかそういうデザインなのか、一部の、特にバナナオーシャン出身者が好む格好のように横にはみ出た膨らみがその大きさをこれでもかと強調している。
以前おっぱい星人の同僚が彼女を見て『大きすぎず小さすぎない、丁度良いサイズ』と評していたが、どんな偏った基準を持っていたらこの母性の象徴に対してそのような評価を下せるのだろうか。
下半身もあの腹ペコキャラとは思えないほど綺麗にくびれ、それでいて触ったら間違いなく良い感触が返ってくると確信できるむっちりとした腰つきをしている。
確かに普段のシャボンソウは清楚なイメージを相手に抱かせる。だが邪な気持ちを抱きながらじっくり観察すれば、清楚とは程遠い男受けする実に魅力的な体の持ち主だった。
そんな彼女が二人っきりの状況で、ビキニ姿で大胆に肌を晒して真後ろにいるのだ。時折手とは違う大きく柔らかい感触が背中に当たるのも非常に心臓に悪い。
そんな不純な考えを持ちながら彼女の姿を目で追い続けていると、背中に湯を掛けられ泡が洗い流された。
「背中洗い終えたよ～。じゃあ次は…」
次？次があるというのか？まさかこのまま前も洗ってくれるというのだろうか？
タオルで隠しているとはいえ下の太陽の剣は既に１００％に達しており、そこから先はもう成人指定不可避である。
これはもう、このまま押し倒しても許してもらえるのではなかろう

か？２００％を目指してゲージが上昇していくのを感じながら、官能の幕開けの合図となるシャボンソウの言葉を待つ。
「髪を洗ってあげるね～。男の人だからってないがしろにしちゃダメだよ？普段から髪もちゃんとケアしてあげないと」
……ハイ。オネガイシマス。
ですよねー…。

その後シャボンソウに髪を洗ってもらい、自分で体の前面を洗って綺麗さっぱりした。
彼女の持ってきた洗髪剤を使い柔らかで丁寧な手つきでケアしてもらったためか、普段と違い髪にも艶が出ている。
初めは彼女の魅力的な姿にドキドキしてしまったが、終わってみれば綺麗好きな彼女のおかげで体だけでなく心まで洗われた気分だ。
シャボンソウにそう言って礼を告げると、彼女ははにかみながら笑いを返してくれた。
「えへへ。魅力的だなんて恥ずかしいよぉ。……ねぇ団長さん、それじゃあ、わたしからも一つお願いしていい？」
ほう、シャボンソウの方から頼みごとをしてくるのは珍しい。
身体を洗ってもらったし、何より普段からとてもよく尽くしてくれている副団長の滅多にないお願いである。どんなことでもというのは無理でも可能な限り叶えてあげよう。
「ありがとー。それじゃあね……わたしのお背中、流してほしいなー…」
……はい？
困惑するこちらをよそに、シャボンソウは先ほどまで自分が座っていた椅子に座り背中を向けてきた。そしてそのままビキニの紐をほどき、胸の布を手で押さえながら白磁のような肌の背中をこちらに晒す。
「わたしね。団長さんを洗ってあげたくて、軽く流しただけですぐに水着と道具を持ってここに来たの。だからまだ自分の体をしゃわしゃわしてなくて、団長さんにお背中流してほしいなーって…」

鏡に映る、少しあどけなさを残す、少女から女への過渡期にある整った顔が赤らんでいる。
それは、蒸気にあてられた熱とは明らかに別物であろう。
押さえつけられた胸が柔らかく形を変え、恥ずかしさから少し早くなった呼吸に合わせて上下に大きく動いている。
先ほどまで鏡越しに劣情を含んだ目で彼女の姿を見ていたが、今度はこちらが鏡越しに何かを期待した目で彼女に見られていた。
「団長さん。わたしがお背中洗っている間、ずっとわたしのこと…わたしのおっぱい、見てたよね？だって今のわたし、こんなエッチな水着を着てるんだもん…」
女性は己に向けられる男の目線に敏感だというが、例に漏れず彼女もこちらの視線に気付いていたようだ。だがそんなことがどうでもよくなるくらい、後半の言葉が頭の中で反芻される。
「男の人って、おっぱい好きだもんね…。でも、団長さんがあそこまで見てくれるのは嬉しい予想外だったかなー。男の人がどんな水着やシチュエーションが好きなのか調べておいてよかったよ♪」
つまりこれまでのこちらの興奮は、シャボンソウの計算だったということか。ほんわかした雰囲気の彼女だが、幼少期に政治家や商人を目指して勉強していただけあって頭のキレはかなり良く回転も速い。
そして自分がどんな目で見られるか分かった上で、この扇情的な格好に身を包んで来たというのか？
裸の男と二人きりになる、この空間に。
「……団長さん、わたしも子供じゃないから……分かってるよ？」
それからしばらくして、もう一度二人で体を流し合うことになった。

酒飲みオンナ

窓から眩しい光が射し込み、朝を迎えたことを告げている。
未だに覚醒しきっていない頭で無理やり体を起こし自身の体に目を向けると、ここでようやく自分が何も身に纏っていないことに気付いた。
「すぅ……すぅ……」
隣から可愛い寝息が聞こえそちらに目を向けると、自分と同じように裸でベッドに入り、幸せそうな寝顔をしている花騎士がいる。
何故彼女がここにと疑問符を浮かべていたが、脳が徐々に覚醒してきたことでようやく前日のことが甦ってきた。
今日は休日。そしてブロッサムヒルの城下町で祭りが行われる日である。
彼女とは以前から一緒に祭りを回る約束をしており、そのために昨夜はここに泊まり同じベッドで一夜を共にしたのだった。
時計を見ると習慣として体に染み着いたいつもの起床時間。祭りは昼からなのでかなり余裕はあるが、酒をしこたま飲んだ彼女には朝食をしっかり摂らせて体調を整えた方がいいだろう。
寝顔をもっと見ていたいという欲求をぐっと堪えて裸の彼女に手を伸ばし、双丘の方向に伸びかけた手に軌道修正をかけて肩を揺する。
「んん〜?……んぅ…んぁ、だんちょぉ……おはようございます…。ふぁー…んんー…!」
目を覚ました彼女……騎士団の部下であり恋人でもあるヘザーは体を起こし、こちらに挨拶をして豊満な乳房を隠すことなく体を伸ばした。
しばらく二人でベッドから出ずゆったりとした時間を楽しんでいたが、空腹を感じたことでようやく起きる決心がつく。
さすがにこんな朝っぱらから裸のまま過ごすわけにもいかず早々に着替え、ヘザーが台所に立ち朝食の準備を始める。

その間に昨日ベッドに入る前に脱ぎ散らかした服を籠に放り込むが、そこには当然ヘザーの服や下着も含まれている。
「風に舞うふんふふーん♪」
では今彼女が着ているのは何かというと、ヘザーが以前ウチのタンスに押し込んだものだ。そこから当たり前のように引っ張り出して着替え、男である自分に女物の服や下着の片付けを任せてくれているという現状に、エプロン姿で鼻唄を唄っているヘザーの背中を見ながらこそばゆさを感じてしまった。

「何だかこうしてると、私たち夫婦みたいですね」
ヘザーが作ったスクランブルエッグとトーストを食べていると、向かい合って食べているヘザーがニコニコとしながら言ってくる。
確かにヘザーとは恋人だし、一端の男と女として何度も愛を囁きあい朝を迎えてきた。
おまけに最近は彼女がここに泊まる頻度も増え、服や食器といった私物もどんどん増えてきている。先程の料理も、調理器具や調味料の配置を完璧に理解して台所を完全に使いこなしていた。
言われてみれば、こうしてヘザーと食卓を囲むのもだんだん当たり前のように感じている自分がいる。
「んふふ～。じゃあ旦那様～。わたしぃ、欲しいものがあるんですぅ～」
頬を赤らめ上目遣いでぶりっ子しだすヘザー。だが残念ながらその目論見は目線でバレバレである。
先日騎士団上層部の上司から貰った上物の酒。それを飾っている棚を先程からずっとチラチラ見ていたのだ。唐突に言い出した甘い言葉も、これを引きずり出すための謀略であろう。
だがダメだ。これは祝い事などの然るべき時に開けると決めているのだ。何より今はまだ朝。おまけに昼からは二人で祭に行くのだから飲んでいいわけがなかろう。
「えぇー…団長ばっかりツテでそんな良いお酒貰えてずるいですよぉ！ちぇ～、デート前の景気付け作戦失敗です。……でも、夫婦みた

いって思ったのは本当ですよ？」
…なら、ヘザーさえよければ一緒に住もう。
今は時々泊まるくらいでヘザーの物も少ししか置いてないが、ここにヘザーの物も持ち込んで一緒に生活しないか？
その時に、二人に開けて飲まないか？
「だん、ちょっ…！えっ、ええっ、同棲？！きゅ、急にそんな事言って困りま、いえ、困らないんですが…。そ、その…よろしくお願いします」
不意打ち気味に提案したせいで断られたらどうしようと内心ドキドキしていたが、ヘザーは受け入れてくれた。
こちらからも、よろしく頼む。
「あ、勿論それだけじゃ絶対に足りませんから同棲のお祝いをするときはもっとたくさんお酒を用意しましょうね♪」
……彼女がうっとりするような良い酒を用意しなければならないな。

そんなやり取りで午前中が過ぎ、日が天高くまで登り詰めた。
騎士団長と花騎士としてでなくただの一組の男女として城下町を訪れると、そこは既に熱気で包まれていた。
「おおーっ！ブロッサムヒルは普段から人が多いのに今日はまた一段と凄い数です」
今日は、待ちに待った城下町での祭だ。
温暖で気候が安定したこの時期のブロッサムヒル、しかも女王陛下のお膝元である城下町で行われるということもあり、毎年かなりの規模で行われている。人が集まれば金も集まるということで、各国から稼ぎを求めて来た商人や料理人が屋台が開き街は大にぎわいだ。
そして当然、そんな各国の料理に合うような様々な酒も提供される。
「くぅ～！待ってました待ってましたー！さあ団長っ！今日は昼からお酒を飲んでおやつがわりにお酒を飲んで夕飯と夜食と一緒にお酒を飲みまくりますよーっ！」
そして当然、呑兵衛はこのテンションである。

ヘザーが祭に参加したがっていたのは、屋台の料理ではなく酒が目当てだからだ。
各国から持ち寄られた酒を美味い食べ物と共に飲み歩くことが出来るということで、数日前から随分とテンションが上がっている。
「ごくっ、ごくっ、ごくっ……！かーっ！やっぱりどんな時でもまず一杯目はこれですねー！濃くていいですねー。そしてこの唐揚げもいい塩梅で…美味いっ！」
気付けばヘザーは既に祭の目的にありついており、唐揚げをアテに飲み始めていた。
じゅうじゅうとまだ音を立てている熱々の唐揚げに、シュワシュワと泡立ち白と金のコントラストを描く酒。そんなもの合うに決まっている。反則的組み合わせだ。
「これほんと美味しいですっ。団ちょ…あなたも食べてください、はい、あーん♪」
往来のど真ん中だというのに唐揚げを差し出され一瞬躊躇してしまうが、同棲が決まり新婚ごっこに興じているヘザーは期待のこもったキラキラとした目でこちらを見てくる。
これを無下に断るなど男が廃る。周囲の暖かい目を意識せぬようヘザーの手で口に運んでもらい、咀嚼して味わう。
…美味いっ！
噛むたびに柔らかな肉が弾けてジューシーな肉汁が口の中に広がり、旨味を舌にもたらしてくる。味付けも脂の旨さを引き立てるよう絶妙な加減がされており、いくらでも食べられそうである。
だが何かが足りない。いや、足りないものが何かなど最初から分かりきっているではないか。
「ふふっ、はいどーぞ」
ヘザーが差し出してきたコップを受け取り中身を一気に飲み干すと、炭酸が口内の脂を押し流しすっきりとさせ、代わりに美味い苦味とアルコール特有の熱さをもたらしてくる。
この出会いのために両者は生まれてきたのかと思わせるようなタッグ。酒が飲めることがどれほど幸せなことなのかと分からせら

れ、心は完全に屈服していた。
酒と料理に舌鼓を打っていると、ふと今手に持っているものが何なのかを理解する。
これは…もしや先程までヘザーが口を付けていたコップではなかろうか？
彼女の方を見ると悪戯成功と言わんばかりの表情を見せているが、酒とは明らかに違う原因で真っ赤であった。
「え、えへへ…今までいっぱいキスして、それ以上のこともいっぱいしてきたのに…何だか恥ずかしいですね」
自爆気味のヘザーが微笑ましく、そしていつも以上に可愛く思える。
ウチのお嫁さんはいたずらっ子だな。
「おおお、およっ!?だ、団長っ、まだ、まだ早いですよぉっ!?」
お返しとばかりにヘザーの耳元で囁くと、お嫁さんという言葉に過剰に反応し朱色が耳まで広がっていく。
さすがにからかい過ぎたと思ったが、どうやら浮かれているのはヘザーだけではなかったようだ。
まだまだ日は高い。ここで愛を囁きあってもいいが、それで互いに疲れ果ててはせっかくの祭を楽しめない。
増えてきた人混みではぐれないよう手を差し出すと、ヘザーは嬉しそうに握り返してきた。
「もうっ、いたずらっ子はどっちですか！よーしっ！こうなったら団長の奢りで夜まで飲みまくりますよー！」
勘弁してくれと笑いながら、手を繋いだまま二人でゆっくりと歩きだした。